

主 題：パウロの誇り4

聖書箇所：ローマ人への手紙 15章19 - 29節

ローマ15：19から見てゆきましょう。私たちは使徒パウロが誇りとしていたことを続けて学んでいます。そして、前回もその誇りについてパウロのメッセージを聞きました。パウロは「私の誇りは主からいただいたこのすばらしい福音宣教という務めである」と言います。パウロはこのすばらしい救いのメッセージを語るということに大きな喜びをもっていました。もっと正確に言うなら、そのことを誇っていました。こんなすばらしい務めを神は私に与えてくれたということ、このすばらしい務めをいただいたことを誇っていたパウロ、彼が誇っていたのはその務め以上に、もちろん、救いを与えてくださった私たちの主イエス・キリスト、この救い主です。

なぜなら、このイエス・キリストは罪人を救ってくださるからです。主イエス・キリストは救われた罪人を通してみわざを為されるからです。救われた罪人を用いてくださり、彼を通してご自身の栄光を現わされるのです。このようなすばらしいみわざを為してくださる主を、パウロは心から誇りました。なぜなら、それらのことが彼自身に起こったからです。覚えておられるように、彼はダマスコに向かっていた。今、私たちはニュースでその町の名を聞いています。内戦が起こっているシリアの首都はダマスコです。ちょうど、パウロがもっと多くのクリスチャンを迫害しようと向かっていたあのダマスコが、今もこの地理上に残っています。そこに向かっていた時にパウロはイエス・キリストにお会いしました。そして、神の恵みによってパウロはこの救いに与りました。その時から新しい人生が始まりました。主の証人としての新しい人生です。ローマ15：18にそのことが記されていました。彼は「異邦人を従順にならせるため」、つまり、異邦人に救いをもたらすために、異邦人伝道のために神は私を召してくださり、その働きのために神は私を用いてくれていると、パウロはそのようにこのローマのクリスチャンたちに説明をしました。それはすでに見たところです。

まさに、パウロが救われて、クリスチャンたちはそのパウロの救いを見て動揺していました。この人物はクリスチャンを迫害するためにこの町へやって来たのではないのか？と。そのときに主がアナニヤに対して言われたことばを思い出します。使徒の働き9：15「しかし、主はこう言われた。「行きなさい。あの人はわたしの名を、異邦人、王たち、イスラエルの子孫の前に運ぶ、わたしの選びの器です。」、その通り、神はパウロをお用いになりました。ですからパウロは、「神に逆らっていた私がこのような神の祝福をいただき、救いに与り、それだけでなく、神のために役に立つ者として神が私を用いてくださる。」ということを大いに喜び、そのすべてを為してくださった主イエス・キリストを誇っていたのです。だから、彼は多くの人たちにこの福音を語りました。しかし同時に、パウロは罪人を救う働きは主の働きであるということを知っていました。どんなに優れた信仰者でも、パウロであっても、罪人を救いに導くことはできません。それは主のみわざです。ですから、パウロはどこに行ってもキリストの福音だけを正確に語り続けて来たのです。パウロはそのことを18節から記しています。

パウロはどのように伝道したのか？

1. ことばと行ないによって 18節

神はパウロ自身を変えて、彼のことばも行ないも変えて、神のすばらしさを証する者として用いてくださったのです。確かに、神はこのように私たちを変えられます。エペソ2：10に「私たちは神の作品であって、良い行ないをするためにキリスト・イエスにあって造られたのです。」とあります。だから、救いを受けた者たちは神が喜ばれる働きをする者へと変えられていくのです。良い働きをする者として神は私たちを造り変えてくださったのです。しかも、このみことばはこのように続きます。「神は、私たちが良い行ないに歩むように、その良い行ないをもあらかじめ備えてくださったのです。」と。感謝なことに、神が救ってくださった人、神が罪を赦してくださった人はこのように人生が変えられるのです。だから、パウロのことばも行ないも変えられたのです。

2. しるしと不思議をなす力によって 19節

いろいろな奇蹟をもって神はパウロを用いたと言います。神はパウロを通して様々な奇蹟を為された。なぜなら、新約聖書が書き終わられていなかったときに、パウロのメッセージが真実に神からのものであることを証明するために、神は敢えてそのような奇蹟を為されたのです。限られた間のことです。

3. 御霊の力によって 19節

私ではない、神が働いて人々を救ったと言います。だから、パウロは コリント2：4で「そして、私のことばと私の宣教とは、説得力のある知恵のことばによって行なわれたものではなく、御霊と御力の現われでし

た。」と書いています。パウロは雄弁だから、パウロは理論家だから、パウロは個人伝道に大衆伝道に優れているから、多くの人々が救われたのではありません。神が彼の語った福音のメッセージを用いて罪人のうちにみわざを為したのです。そのことを彼はよく知っていました。「説得力のある知恵のことばによって」救われたのではなく「御霊と御力の」わざであると。覚えておられるように、使徒の働き 1 : 8 で主は弟子たちにこのように言われました。「しかし、聖霊があなたがたの上に臨まれるとき、あなたがたは力を受けます。そして、エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、および地の果てにまで、わたしの証人となります。」と、私たちは証人なのです。その証人に力を与え、その証人のメッセージを使って人々を救いへと導かれるのは主ご自身であると言います。

ですから、パウロが神から与えられたこの大きな務めを誇っていたように、確かに、私たちは例外なく、主によって救われた一人ひとは主によって用いられる道具です。神のみこころのために私たちを用いてくださる、まさに、神の道具です。私たちが救ってくださり、私たちのような者を用いてくださり、神にとって役に立つ者として私たちを使ってくださる、こんなすばらしい神、主イエス・キリストこそが私たちの誇りであると、パウロと同じように、私たちは声を大にして「その通り、イエスこそが私たちの救い、イエスこそが私たちの誇りである。」と宣言する者たちです。

先日、あるものを読んでいるとき、あのムーディー聖書学院を作ったD・L・ムーディーの生涯の変化の出来事を記したものがありました。非常に興味深かったので皆さんに紹介します。ある集会である説教者がこんなことを語ったと言います。「人が自らのすべてを無条件に聖霊なる神にささげるなら、いったい聖霊はどのようなすばらしいことをその人を用いて為さるだろうか？ 私たち信仰者が私たちのすべてを主にゆだねるときに、主はその人を用いてどんなすばらしいみわざを為さるだろうか？」、そのように聞いたときに、ムーディーはこのように自分に問い掛けたと言います。「なぜ、私がその人であってはいけないのか？」と。ムーディーが望んだことはその人になりたい、私のすべてを無条件でこの方におささげして、この方に使っていただきたいと、その願いをしたときに神はムーディーを使ったのです。彼は小学校の教育しかありませんでした。神学校にも大学にも行っていません。神の前にそのようなことはどうでもいいのです。神が求めておられるのは「主よ、私のすべてを用いてあなたの望まれることをしてください。」という人です。その人を神は喜んで用いられるのです。私たちは神の道具でしかないのです。

そして、多くの人たちが神の前に「どうぞ、私を使ってください」との祈りをもって自らをささげ、そして、神が確かに彼らを使われたのです。パウロと同じように、このような信仰者も「私の誇りはイエス・キリストである！」と叫び続けていたことでしょう。その集まりの中に私たちもいるのです。

この手紙を記した目的と理由からうかがえるパウロの人物像

パウロはこの手紙の後半で15章になって、なぜ、この手紙を記したのかその理由をローマのクリスチャンたちに書きました。そのことを私たちは見て来ました。ときに、きびしい手紙でもありました。また、手紙の内容を見ると、すでに学んで来たように非常に基本的なことでした。ローマのクリスチャンたちは信仰的に成長した者たちでした。彼らは信仰において幼子ではなかったのです。固い食べ物を食べるような大人だったのです。その大人である彼らがパウロから聞いたメッセージは基本的なものでした。我々がいかに罪人であり、救いは神の恵みによって信仰によって与えられるのであると、「パウロ、そんなことはみな知っているよ」と言ってもおかしくないような内容でした。ですから、パウロは最後になって、なぜ、このような手紙を記したのかそのことを記したのです。その説明を私たちは順番に見て来ました。今日、私たちはその最後のところ、特に、19 - 29節を見て行きますが、ここにはパウロがどのような人物だったのかということを見ることができます。その説明の中にもパウロという信仰者がどのような信仰者であったのかを知ることができます。ですから、今日私たちはこのみことばの中で、パウロの人物像、特に、二つのことをごいっしょに見たいと思います。

一つは、パウロは主に対して非常に忠実な人でした。もう一つは彼は主を心から愛する人、同時に、それは隣人を愛する、そのような愛の人であった。そのことを見て取ることができます。

A. 主に忠実であった人 19b - 24節

まず、一つ目を見てみましょう。彼は主に対して非常に忠実な人物でした。今さら言うことではないのですが、というのは、みことばを見た時に、すべてのみことばが私たちにそのことを教えてくれます。確かに、パウロは忠実な人物でした。この彼の手紙の最後にもそれを見て取ることができるのです。

1. 務めに忠実 19b - 21節

なぜなら、最初に、19b - 21節までに、彼は務めに対して非常に忠実であったことを見ることができます。

1) 福音宣教 19b節

19b節に「その結果、私はエルサレムから始めて、ずっと回ってイルリコに至るまで、キリストの福音をく

まなく伝えました。」と書かれています。彼はこの福音宣教の働きに対して非常に忠実だったのです。見ていただきたいのは19節に彼は福音を語っていると記していますが、その福音に関して「**キリストの福音**」と言っています。16節を見ると、ちょうど真ん中に「**私は神の福音をもって、**」と書かれています。また、同じ16節には「**聖霊によって聖なるものとされた、**」とあり「**聖霊**」の働きを記しています。パウロ自身が三位一体の神を正しく理解していたことが見えませんか？イエス・キリストの福音は、父なる神の福音でもあり、そして、聖霊なる神がその福音を用いて人々のうちにわざをなしていると言うのです。人の救いにおいて、こうして三位一体の神が働いておられることを彼自身が正しく理解していたことを私たちは見て取ることができます。ですから、彼はここで誤って「**キリストの福音**」と記したのではないのです。父なる神もイエス・キリストも聖霊なる神も唯一の神であることを彼は確信していたからです。

さて、この福音宣教について、彼の熱心さを知る二つのことばを彼はここに記しています。一つは「**くまなく伝えました。**」であり、もう一つは「**ずっと回って**」と書かれています。

(1)「くまなく伝えました」 19節

「くまなく伝えた」という動詞は「何かを十分に作る、福音をその達し得るところまで宣べ伝える」ということです。内容を見ると、ある神学者たちはこれはその福音のメッセージを正確に余すところなく語ったという内容のことであると言います。でも、これはどう見ても地理のことです。「**エルサレムから始めて、ずっと回ってイルリコに至るまで、**」と言っているからです。これらは実際に存在する町々です。ですから、パウロが言いたかったのは、この福音のメッセージを彼は行けるところにすべて出て行って、語ったということです。

(2)「ずっと回って」 19節

また、「**ずっと回って**」とあります。今話したように、エルサレムからイルリコまで、彼は神によって導かれるところ、あらゆるところに出て行って福音を語り続けたのです。直線でそこまで行ったのではないのです。イルリコというのは現在のアルバニアです。先日プロボースト先生が来られましたが、あの旧ユーゴスラビア、ギリシャの北です。彼はエルサレムからずっと出て行って、イルリコ、現在のアルバニアまで行って福音を語ったということです。その様子は使徒の働き20章の中に簡単にですが、ルカが記しています。彼はマケドニアに向かって出発するのですが、20:2「**そして、その地方を通り、多くの勧めをして兄弟たちを励ましてから、ギリシャに来た。**」と書かれています。マケドニアにいてそこからギリシャに下りて来るその間に、恐らくパウロはこのイルリコの方面を訪問したのでしょう。そして、福音を語ったのです。距離から言うと大体2,253キロ位です。東京-大阪間なら2往復以上です。その当時、車もないわけですから、パウロはどれ程精力的にこのような町々を訪問したことが、これは決してすべての町を訪問したというわけではありません。パウロの戦略はカギになる町を訪問して、そこで伝道するのです。そして、そこで救われた者たちがそれぞれ自分の町に帰って伝道するという方法を彼は用いています。ですから、すべての町のすべての家を訪問したということではないのです。しかし、彼は主の導きに従って、これは後で見て行きますけれども、あらゆるところで、くまなくこの福音を宣べ伝え続けるという大変な働きをしたわけです。もう止めておこうというのではなく、彼は出て行って機会を探りながらキリストの福音を語り続けたのです。こうして見た時に、彼は非常に福音宣教に対して忠実でした。

2) 開拓伝道 20-21節

また同時に、20-21節を見ると、パウロは自分の神から与えられている重荷というのが開拓伝道であると言っています。20節「**このように、私は、他人の土台の上に建てないように、キリストの御名がまだ語られていない所に福音を宣べ伝えることを切に求めたのです。**」とあります。この「**他人の土台に**」建てるという「**土台**」というのは教会のことです。すなわち、新しく始めた教会のことです。開拓をして教会が誕生したそのことです。ですから、「**他人の土台**」というのは、パウロ以外の人が開拓をして建てられた教会です。そういう教会に行き行って働きをすることは彼自身示されていなかったのです。それは私の働きではないと言うのです。「**私は、他人の土台の上に建てない**」と言います。彼は自分で開拓をして自分で教会を始め、そして、その教会の成長のために努力をした人物でした。もちろん、私たちが覚えなければいけないことは、彼が「**私はしない**」と言った他人の土台の上に建てる働きが間違っているのではないということです。聖書の中を見ると、アポロという人物はそのような働きをしました。コリント3:6に「**私が植えて、アポロが水を注ぎました。しかし、成長させたのは神です。**」とあります。パウロが開拓をして、その後、アポロがやって来てその教会を成長させて行ったのです。

ですから、いろんな働きが存在するわけです。パウロは、私は福音が語られていないところに出て行って、そこで福音を語るように召されていると言うのです。20節に「**キリストの御名がまだ語られていない所に**」とありました。これは「**良き知らせ**」がまだ宣べ伝えられていないところということです。ですから、パウロが持っていた願いは、福音の良き知らせがまだ伝えられていないところに行き行ってこのメッ

セージを伝えることでした。

(1) 開拓に熱心であった

開拓に対して彼は非常に熱心な思いを持っていました。ですから、そこに「切に求めた」ということばが出て来ます。この動詞も「あることを成功させようと一生懸命努力する」という意味です。彼はこの働きのために、開拓のために一生懸命努力をしていたということをここで告白しています。

(2) 熱心さの理由 : 預言の成就を信じていた

なぜ、彼がそこまで熱心だったのか？ 21節を見ると、その理由を見て取ることができそうです。「それは、こう書いてあるとおりです。「彼のことを伝えられなかった人々が見るようになり、聞いたことのなかった人々が悟るようになる。」と。実は、これは旧約聖書イザヤ書52章のみことばを引用しているのですが、ヘブライ語の聖書から引用しているのではなくて、ギリシャ語訳の旧約聖書、七十人訳と言われていますが、その聖書のみことばを引用しています。ですから、今私たちが旧約聖書イザヤ書52:15を見ると確かに違います。でも、言っていることは同じなので見てください。「そのように、彼は多くの国々を驚かす。王たちは彼の前で口をつぐむ。彼らは、まだ告げられなかったことを見、まだ聞いたこともないことを悟るからだ。」とあります。

私たちが見ているヘブライ語の聖書をギリシャ語に翻訳した七十人訳をパウロは引用して、このローマ書15:21にそれを記しているのです。我々がこのイザヤ書52:15を見た時に、最初に「彼は多くの国々を驚かす。」とあります。「驚かす」とは何のことでしょう？ 実は、ここで使われているヘブライ語は「振りかける」という意味です。「振りかける」と言った時に思い出していただきたいのは、旧約の時代にあって、祭司たちは至聖所に入って血を振りかけて、人々の罪の赦しを願いました。そのことばです。ですから、ここで言われているのは、ある人物が人々の罪を赦すために救いをもたらすということです。そして、このローマ15:21で語られていることは、その人物のことを知らない人々が、その救い主のことを知るということです。もちろん、イザヤ書52章の後半には、人々は「まだ告げられなかったことを見、まだ聞いたこともないことを悟るからだ。」と記されています。

このイザヤ書52章の預言は、正確に言うなら、救い主がこの地上に再臨なさる時に起こる出来事のことです。その時に人々は、この方がまさに約束の救世主であったことを知ると言うのです。パウロが言いたかったのは、実は、それはもう始まっている。イエスが地上に帰って来てイエスのことを知らなかった者たちが知るように、今もう既に、イエスのことを知らなかった者たちがイエス・キリストを知っていると云います。ですから、パウロの中では、確かに、イエス・キリストの地上再臨の時に起こるとされているその預言の成就が、今もう既に起こっていると言うのです。なぜ、彼がそのように思ったのか？ 彼はイエス・キリストが今にも帰って来ると言うことを信じていたからです。キリストの再臨が今日起こってもおかしくない、そのような思いを持って歩んでいたからです。だから、パウロは思ったのです。あのイザヤが預言していた救い主のことを知らない人々がこの方を知るようになる。今まさにそれが起こっている。まさに、キリストの再臨の時が近いと。

ですから、パウロは熱心だったのです。私たちもそのことを覚えなければいけないのです。今、世の中で起こっていることを見て、すごいことが起こっているな、また、もっとひどいのは何が起こっているのか全然関心もないことです。私たちは目を開かなければいけないのです。空を見上げて、そして、黒い雲が近づいて来ると我々は雨が降ると思います。だから、傘を持たなければいけないのです。嵐が近いということは、100%正確ではなくても私たちはある程度分かります。私たちはこの聖書をいただいた者として、今がどの時代であり、どういう出来事が起ころうとしているのかということを知ることが必要です。主イエス・キリストの再臨が近いのです。神の審判の日が近いのです。そのことを我々聖書から知っている者たちは、パウロ以上に熱心であってもおかしくないです。パウロは、ひとりでも多くの者たちが福音を聞くようにと、また、福音を聞いたことがない人々のところへ出て行って福音を語り、そこに教会が誕生するようにそのことを願ってそのために彼は骨を折りました。その理由がここに記されていました。ですから、パウロという人物は、今私たちが見て来たように、神から与えられた務め、福音宣教に非常に熱心な人物でした。

2. みこころに忠実 22 - 24節

22 - 24節で、彼は神のみこころに対して非常に忠実な人物であったということを見ることができます。22節に「そういうわけで、私は、あなたがたのところに行くのを幾度も妨げられましたが、」とあります。パウロは神のみこころに従おうと決めそのように歩んでいたのです。彼自身の願いによってではなく神のみこころに沿ったのです。ですから、ときに神は扉を閉ざされることがありました。でも、彼は神のみこころに従うことを一番の願いとしていたゆえに、みこころを求め、それに従っていたのです。32節のみことばをご覧くださいますと、そこにも「その結果として、神のみこころにより」とパウロは記しています。彼は常に神のみこころを求めたのです。

1) 主のみこころを知る

皆さん、我々信仰者にとってすばらしい感謝なことは、我々は神のみこころを知ることができることです。この短い時間にそのすべてのことを説明することはできませんが、みこころを知ることができます。コロサイ 4 : 12 をご覧ください。「あなたがたの仲間のひとり、キリスト・イエスのしもべエパfrasが、あなたがたによるしくとっています。彼はいつも、あなたがたが完全な人となり、また神のすべてのみこころを十分に確信して立つことができるよう、あなたがたのために祈りに励んでいます。」、パウロはこのように言っています。では、どのようにして「神のみこころ」を知ることができるでしょう？

(1) 状況によって知る

一つは、私たちは状況を通して知ることができます。パウロが教えたように「幾度も妨げられました」と、その道が閉ざされるのです。そのような方法で神が働くことがあります。テサロニケ 2 : 18 にも「それで私たちは、あなたがたのところに行こうとしました。このパウロは一度ならず二度までも心を決めたのです。しかし、サタンが私たちを妨げました。」とあります。もちろん、ローマ 1 : 13 には、パウロはローマに行けない理由について「兄弟たち。ぜひ知っておいていただきたい。私はあなたがたの中でも、ほかの国の人々の中で得たと同じように、いくらかの実を得ようと思って、何度もあなたがたのところに行こうとしたのですが、今なお妨げられているのです。」と記しています。神はときとして前に進めないように止められることがあるのです。そのような状況を通して、私たちはみこころを知ることができます。

(2) みことばによって知る

またもう一つは、みことばを通して私たちは神のみこころを知ることができます。コロサイ 1 : 9 には「こういうわけで、私たちはそのことを聞いた日から、絶えずあなたがたのために祈り求めています。どうか、あなたがたがあらゆる霊的な知恵と理解力によって、神のみこころに関する真の知識に満たされますように。」と書かれています。パウロは、私たちは神のみこころを知ることができると言っているのです。「みこころ」ということばを使うなら私たちは何でも通ると思うおとに注意しなければいけません。「みこころ」は「私の心」とは書かないのです。神のお心なのです。

私たちが神のみこころを知ろうとするならば、神のみこころのうちは歩んでいなければみこころは示されないのです。クリスチャンはよく「これはみこころだ」と言って、自分のやりたいことを通そうとします。その結果、大きな失敗をするのです。なぜなら、その人の人生が、その人の日々の生活がみこころに沿って生きていないからです。みこころに沿って生きるということは神のみことばに従って生きるということです。これがみこころだからです。私たちがいつも考えてしまうのは「神さま、どうすればいいか教えてください。夢の中で語ってください。何とか教えてください。」と天使が現れて...、そんなことは起こり得ないのです。私たちは何でも好きなことをやって、だめだったら神が止めてくださるだろうと、もちろん、これは不信仰な態度です。最もシンプルな方法、そして、私たちがしなければいけないのは、私たちがみことばに従って今日一日を生きて行くことです。その生き方こそみこころに従った生き方なのです。そういう歩みをしている人々に神はみこころを教えてくれるのです。なぜなら、みこころのうちは歩んでいるからです。そのような歩みをしている人は、今見て来たように、ときに神が止められることがあります。

パウロはそのように止められたのです。ローマに行こうとしていたのです。みこころに沿って生きていたパウロに対して神はストップをかけたのです。みこころでないからです。私たちにとても大切なことは「どちらにしましょうか？」ではありません。今日、今この瞬間に私は神の前に正しく歩んでいるか、私のうちに罪がないかどうか、あったらそれを神の前に告白して主のみことばに従って喜ばれるように生きて行くことです。そうすると神はちゃんとあなたの心に働きます。

私は 1975 年にアメリカで聖書学校に行った時に、最初に学長に聞いたのはそれでした。「先生、みこころというのは個人的に見出すことはできるのですか？」。私のいた教会では牧師が全部教えてくれました。これがみこころだと。ですから、個人的に知ることができると思っていなかったのです。いつもこれがみこころだ、それはみこころでないと言われたからです。その学長が言われたことは「ちゃんと神があなたに教えてくれる」でした。ほっとしました。聖書が教えていることですから...。そうすると、皆さん、私たち信仰者の歩みは非常にエキサイティングなものです。なぜなら、生きた神が直接あなたに教えてくれるからです。あなたが主のみことばに従って歩んでいるなら神は教えてくれるのです。

もう一つ付け加えるなら、あなたがみこころだということ、本当にそれがみこころなら、周りの人にもそれが分かります。特に、主に従って歩んでいる人たちはそれがみこころだということが確信できます。そのようにして神が働くのです。周りのみなが違うと言っているのに、これは絶対みこころだと言うのはどこがおかしいのです。このようなテストをやってみてください。自分がやりたいと思っていること、これがみこころだと信じ切っていることを、もし、神が「ノー」と言ったら喜んで止めるかどうか自分に問いかけてみてください。「止めます」と喜んで言えるならあなたは正しいのです。でも、往々

にして私たちの心の中を見た時に、「神さま、これだけは止めたくないです。」というときに、私たちはみこころということばを使っていながら、結局、やっていることは自分の心に従うことです。これが私たちの問題なのです。

皆さんもよくご存じのように、みことばの中を見た時に、多くの人々がこうして神によって用いられました。今ゆっくり学ぶことはできませんが、あのヨセフを見た時に、ヨセフがどうしてエジプトの地に行ったのか？神が私をこの地に送ってくれたとヨセフは言います。創世記45：4・5・7・8には「：4 ヨセフは兄弟たちに言った。「：4 どうか私に近寄ってください。」彼らが近寄ると、ヨセフは言った。「私はあなたがたがエジプトに売った弟のヨセフです。：5 今、私をここに売ったことで心を痛めたり、怒ったりしてはなりません。神はいのちを救うために、あなたがたより先に、私を遣わしてくださったのです。：7 それで神は私をあなたがたより先にお遣わしになりました。それは、あなたがたのために残りの者をこの地に残し、また、大いなる救いによってあなたがたを生きながらえさせるためだったのです。：8 だから、今、私をここに遣わしたのは、あなたがたではなく、実に、神なのです。神は私をパロには父とし、その全家の主とし、またエジプト全土の統治者とされたのです。」とあります。

また、エステルを見てもその通りです。なぜ、エステルがペルシャ王の王妃になったのか？なぜ、ハマンがユダヤ人を根絶やしにしようとした時に神がそれを止められたのか？すべて神のご計画です。つまり、私たちの神はご自分のみこころに沿ってすべてのことを為されるのです。それに逆らってはいけないのです。なぜなら、それに逆らうなら神の祝福はないからです。私たちは完全な神のみこころに従って行こうとするのです。だから、「主よ、私の願いはこうですが、どうぞ、みこころのままに為してください。私があるのみこころに従えるように助けてください。」と、そうして、私たちは信仰者として歩んで行くのです。パウロを見た時に、彼はそのように歩んで行きました。

2) 主のみこころを求めると、スペインへの伝道計画 23 - 24 節

そして、23節から見ると、彼は主のみこころを求めています。「今は、もうこの地方には私の働くべき所がなくなりましたし、また、イスパニヤに行くばあいは、あなたがたのところ立ち寄ることを多年希望していましたので、：24 というのは、途中あなたがたに会い、まず、しばらくの間あなたがたとともにいて心を満たされてから、あなたがたに送られ、そこへ行きたいと望んでいるからです。」と。パウロはここでローマの人々に、自分自身の伝道計画を話します。「私はスペインに伝道に行こうと思っている」と彼は告げるのです。なぜ、このことをローマの人々に告げたのでしょうか？その理由が記されています。

スペイン伝道に向かう前にローマに立ち寄る理由

・ローマ教会から支援を得るため

24節に「あなたがたに送られ、そこへ行きたいと望んでいるからです。」とあります。「あなたがたに送られ、」ということばは「派遣される」という意味です。つまり、パウロが望んだのは、このローマのクリスチャンたちによって、この教会によって自分がスペイン伝道に派遣されることを望んでいるのです。まさに、今私たちが見ているように、宣教師が教会から派遣されて行くように。今まで彼はアンテオケの教会から派遣されていたのですが、今度行こうとしているのは東ではなくて西です。このローマの教会から私は派遣されたいとパウロは望んだのです。そこでパウロは、スペインに行く前にローマに立ち寄ってあなたたちから送られたいと、そのような願いをここでパウロは彼らに語るのです。「心を満たされてから、」と言います。金銭的に満たされるだけでなく、心も満たされて私は送られたいと。

スペインというのはローマ帝国の一番西に属する国でした。このスペインに関してバークレイはこのように説明します。「当時、スペインは非常に多くの天才を輩出していた。」と。その中でもセネカという人物は偉大でストア派の哲学者でした。この人物は後にローマ皇帝ネロの教師となって活躍するのです。ですから、スペインということを知ったときに、非常に多くの人たち、世に影響を及ぼす人たちがこのスペインから出ていたので、パウロはスペインに行ってスペインに教会を建てたいと、そのような願いを持ったのです。皆さん、スペインと言っても余りピンと来ないかもしれませんが、旧約聖書の中にヨナという預言者がいたことが記されています。ヨナはニネベに行くと神に言われましたが、彼はタルシシュに行ったのです。タルシシュというのはスペインの南西部に存在する港です。パウロはあのスペインに行って、まだ、福音を聞いたことのない人がたくさんいるから、そこに行って私は伝道したいとこのように願ったのです。

いつも伝道の機会を探っていたパウロ、神のみこころなら、ローマのあなたたちによって送られて、そして、あの地において私はキリストの福音を伝えたいと、まさに、パウロはキリストを誇る者としてそのように生きました。私たちもキリストを誇る者として、キリストをもっと証して行きたいものです。パウロは再臨が近いことを知っていました。だから、ますます熱心にやりました。私たちは目覚めなければいけません。目覚めて、しっかりとこの福音を語り続けて行くことです。信仰者の皆さん、福音宣教に疲れていませんか？福音宣教に希望を失っていませんか？何度語っても語っても、愛する者は救わ

れない。あなたは人を救うことはできません。失望しているのは、あなたがその人を救おうとしているからです。あなたがどんなに頑張っても、どんなに巧みに語っても、パウロでさえ言うのです。人を救うことはできないと。だから神が私たちに与えてくださった務めは、キリストを証するという務めです。もし、その働きに失望しているのだったら、もう一度、あなたに与えられた務めを思い出してください。結果は神のみわざです。私たちに問われているのは、私たちに与えられた務めを私たちが果たしているかどうかです。

キリストを証しなさい、この福音のメッセージを語り続けていきなさいといわれます。その務めをいただいた者として、その務めを与えてくださった主を誇りながら、主を証し続けてください。この1週間、いろいろな形で私たちはこの福音宣教に携わることができます。祈ることができます。ともに働くことができます。そして、何よりもしっかり主を見上げることによってあなたが遣わされているその場で、キリストの証人として用いられますように、そのことを願いながら、用いてくださる主にすべてを委ねて、主がどんなことを私を通して為さるのか、そのことを期待しながら生きてください。主は必ずあなたを使ってくださる。それが主の約束です。